

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

マジェスティック (THE MAJESTIC)

2002 (平成14) 年7月6日鑑賞

Data

監督：フランク・ダラボン

出演：ジム・キャリー／マーティ
ン・ランドー／ローリー・ホ
ールデン／デイビッド・オグ
デン・スティアーズ

👁️👁️ みどころ

1951年、ハリウッドに「赤狩り」旋風が吹き荒れた。失意のピーターが流れついたのはある田舎町。そこでピーターはルークとして迎えられ父親と恋人にも出会う。そして映画館「マジェスティック」の再建。果たしてピーターの記憶は戻るのか……。合衆国憲法が保障する「表現の自由」の重みと、「自由の国アメリカ」を叫ぶクライマックスは感動的。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<1951年、ハリウッド>

舞台は1951年のハリウッド。ピーター・アプトン（ジム・キャリー）は、ハリウッドで活躍中の新進の脚本家。ものすごいハンサムボーイだ。今は、自分の脚本した映画『サハラの大脱走』がジョン・ヒューストン監督の『アフリカの女王』とともに、ハリウッドの有名映画館「チャイニーズ・シアター」で上映中。プレイボーイのピーターは、恋人である出演女優とイチャイチャしながらその映画を鑑賞中。ピーターは幸せの絶頂だった。

<赤狩りの嵐>

ところが事態は急変。第2次世界大戦の終了後、世界は米（自由圏）・ソ（共産圏）に分かれ、否応なく「米ソ冷戦」下の緊張状態におかれた。ドイツにおけるベルリンの壁や朝鮮半島の南北分割はその象徴であったし、後日（1962年）勃発した「キューバ危機」は、本当に核のボタンに大統領の手が届きかけたほどの世界の危機だった。したがって1950年代は、あの民主主義国のアメリカでさえ共産党＝共産主義の脅威におびえ、国民相互が疑心暗鬼となり、いわゆる「赤狩り」の嵐が吹き荒れた時代だった。そんな1951年のハリウッド。映画界もその例外ではなかった。数多くの名監督や名優が「アカ」の

汚名を着せられて、映画界から追放された。この映画のパンフレットによると、1954年までにブラックリストにのせられた映画人は324名にのぼったうえ、「ハリウッド・テン」と呼ばれた10名は実刑まで受けたとのこと。また1956年のアカデミー脚本賞を受賞したハリウッド・テンの一人である人物は、その榮譽に浴することもできず、オスカー像は事務局に保管されたままになっているとのこと。それほど当時の「赤狩り」は凄まじかったわけだ。

＜ピーターもその嵐に＞

そして、あろうことか、あのプレイボーイの新進脚本家ピーターが、下院非米活動委員会(HUAC-1951年当時、秘密活動をする共産主義者たちをあぶり出した組織)から共産主義者と名指しされ、審問会への呼び出しを受けたのだ。なぜそんなことになったのかはピーターにはさっぱりわからない。しかし、審問会へ出席していくら弁解してもそれは通用しないことくらいは、「赤狩り」の時代に生きているピーターには十分わかっている。ピーターのお先は真っ暗。脚本家としての前途も閉ざされ、恋人にもふられてしまったピーターはヤケ気味。ただ一人(?)ピーターの話聞いてくれるモンキー人形を相手に酒を飲み、その時の思いつきでアメリカ西海岸をガソリンが切れるまで夜通しぶっとばそう、となった。しかしそのドライブ中、危険な橋を渡ろうとした時、思いがけない事故。ピーターは車ごと海の中へ転落してしまった。コンクリートの橋ゲタに頭を打ちつけたピーターは・・・。

＜ピーターの流れ着いたまちローソンーピーターはルークか?＞

海岸に打ち上げられたピーターを発見したのは、毎朝犬を連れて海岸を散歩する老人。老人はピーターを連れてまちのレストランへ。ピーターはそこで食事をさせてもらったうえ、お医者さんまで呼んでもらう。まちの人たちはみんなピーターに親切だ。しかしピーターは自分が今なぜここにいるのか? どうやってここに来たのか? そしてまた一体自分が何者なのか? これらが全くわからなくなっていた。そう、頭を強く打ったショックで記憶喪失になってしまったのだ。ところがローソンという名のこの田舎町の人たちは、会う人ごとにピーターに対して「どこかで見た顔だ」と言う。極めつけは、「わが息子よ! ルークよ。生きていたのか!」とピーターを抱きしめるハリー・トリンプル(マーティン・ランドー)の出現。ピーターには何のことかさっぱりわからないが、話は次のとおりなのだ。すなわち、

①ピーターは、ハリーの息子ルークなのだ。ルークはまちの若者たちと同様、お国のために戦争に行き、目覚ましい活躍をして戦死した(とされていた)。ルークは大統領から勲章までもらっている。

②ローソンのまちでは、多くの若者が戦地に赴き、多くの戦死者を出した。戦後、国か

ら銅像が贈られたが、悲しみにくれている町民はそれを役所の地下にしまったままにしている。

③ハリーはローソンのまちで「マジスティック」という映画館を経営していた。かつて「マジスティック」は観客が次々と押し寄せるネオンきらめくすばらしいロードショー館だった。

④スタントン医師の娘アデル・スタントン（ローリー・ホールデン）は、弁護士を目指して司法試験を受験するため都会に出ていたが、受験が終わり、ふるさとのローソンへ帰ってきた。そのとたん亡くしたはずのかつての恋人ルークに出会った。

<ルークとして生きる決心>

ピーター（ルーク）はこの激変した現実の中で、とまどいながらも、愛情を注いでくれる父親ハリーとの生活に次第に馴れ、またアデルとの恋も順調に復活(?)していった。そして、多くの若者を戦争で失ったローソンの町民たちには、ルークの「帰還」により新たな希望が芽ばえ、まちも次第に活気を取り戻してきた。町民総出のルークの歓迎会。そこでダンスを踊り、ピアノを弾くルーク……。一体ルークはこのダンスをどこで覚えたのか？またクラシックピアノの名手であったルークが今なぜノリノリのジャズピアノを弾くのか？「戦死」してから「帰還」するまでの9年半、ルークは一体どこで何をしていたのか？ルークの失われた記憶が戻ったら、一体ルークはどうなるのか？

疑問は次々と湧いてくる。しかし父親のハリーは「過去のことはいい。今ルークが目の前にいることが大切なんだ」と考え、ルークと共に幸せな毎日を過ごす。またアデルは、恋人時代のルークを思い出しながら、目の前にいるルークとの幸せな恋の「成就」を夢みている。そんな幸せな毎日を過ごす中、ピーターは次第にハリーやアデルの心に触れていき、心の平穏を取り戻していく。また多くのまちの人たちの温かい気持ちに馴れてきたピーターははじめてごく自然に、ハリーを「お父さん」と呼んだ。ピーターは自分の記憶にない過去を考えるよりも、このあたたかい田舎町ローソンの「ルーク」として生きていこうと決心したのだった。そして「マジスティック」の再建を決意。町民の協力を得て、立派なネオン輝く「マジスティック」の改修を成功させた。

「マジスティック」のオープンの日。町民はこぞってこの映画館に足を運んだ。そして連日の大入り。そこで上映するのは「巴里のアメリカ人」「欲望という名の電車」「地球の静止する日」など、1951年当時に大ヒットした名作ばかりだ。ハリーは「マジスティック」が華やかだった昔と同じように、フィルムを操作することの幸せをかみしめながら、またピーターは窓口で「もぎり」をしながらか、この幸せが一日も長く続くように願うばかりだった。

<ピーターの搜索網>

一方、非米活動委員会は、審問会の直前行方不明となったピーターの捜索に躍起になっていた。話はどんどん大きくなっていき、いつの間にかピーターは共産党の「大物」に仕立てられていた。そんな中、ピーターが打ち上げられた砂浜に、失意のピーターの「友」であったモンキー人形と車が打ち上げられた。これによって捜索の網は次第に狭められていった。そして、「ローソンのまちで幸せそうに生きているルークは、大物共産党員ピーターが身を隠すための仮の姿だ!」。捜査官たちはそう確信した。

＜よみがえったピーターの記憶＞

他方、今やすっかりルークとして幸せな毎日を過ごしていたピーターは、ある日「マジエスティック」で上映される映画『サハラの大冒険』を見ていた。すると、何と不思議なことに、「見せ場」での俳優のセリフが、ピーターには次々と先に口に出てくるのだ。これは一体どうしてなのだ？自分是一体何者なのだ？そして、『サハラの大冒険』のポスターを見たピーターは、その中に脚本ピーター・アブルトンと書かれてあるのを見て、ついに自分がピーターだったという記憶がよみがえったのだった。

＜ハリリーの死、アデルとの恋は・・・＞

ちょうどその時、フィルムを巻いていた父親のハリリーが心臓発作で倒れた。ルークとして、ハリリーの死を見送ったピーターは、今度はアデルとの恋の結末もつけなければならない。自分がルークではなくピーターであることを告白するピーター。アデルは当然混乱する。アデルはピーターを再会できたかつての恋人ルークとして愛していたのではなく、ピーターその人を愛していたことに気づいていたのだ。こんな中、ついに非米活動委員会が、ピーターの前にあらわれ、ピーターに対して審問会への出頭を命令する。ルークがルークではなかったことを知り、その上共産党員が身を隠すためウソの芝居をしていたと理解した町民たちの失望。それはルークを希望の星と見ていただけに、深く悲しいものだった。ピーターを見る町民の目には失望と軽蔑の色があふれ、「マジエスティック」への客もいなくなってしまう。

＜審問会一転向声明をめぐる論争＞

他方審問会をどうするか？ピーターは、弁護士から、交渉の結果、ピーターが「転向声明」すなわち、自分が共産党に入って活動したことの誤りを認めて反省し、その活動から身を引くことを明らかにし、かつ数名の同調者の名前を出せば無罪放免する、との妥協案が出されたことを知った。元来、特に政治的志向をもっておらず、ましてや共産党の活動とは無縁なピーターは、「自分の大切な人生を楽しむため」、審問会でこの声明を読みあげることが気楽に(?)承諾した。しかしそれに納得しないのが、つい先日司法試験合格の通知を受けたアデル。アデルは「アメリカには合衆国憲法がある。表現の自由は保障され

ている。思想信条の相違による差別は許されない。審問会でウソの転向声明を読みあげるとなんてダメだ！」と叫ぶ。

しかし政治的にノンセクトのピーターは、「それは法学部での議論だ。現実にはそうじゃない。これを読めば無罪放免となるんだ。読まなければ監獄行きだ。僕は自分が幸せになりたいんだ！」と反論する。

そして議論は平行線のまま、ピーターは審問会へ出頭するため汽車の中の人となった。

＜合衆国憲法とルークのラブレター＞

汽車に乗る時、ピーターはアデルの父親から「アデルからだ」とことづかった品物を受け取った。中身が何かは父親も聞かなかったとのこと。汽車の中で封を開くとそれはアメリカ合衆国憲法の小冊子だった。合衆国憲法では、表現の自由は保障される、集会の自由も保障されると高らかにうたわれていることをアデルはピーターに伝えたかったのだ。そして、小冊子にはさまれていたのは、何と、戦地に向かうルークから恋人アデルに宛てた手紙だった。

「僕はこれから戦地に行き自分の任務を果たす。もし僕が戦死しても、僕はいつも君の側にいる。やさしい風が君の頬をなでたらそれは僕のキスだと思ってくれ」。

アメリカ合衆国の国民としての義務感と強い信念を持ち、しっかりと自分の任務を果たして戦死した、勇気と誇りと信念の人ルーク。そして、そのルークの帰還を信じてひたすら待っていた恋人のアデル。ローソンのまちの人たちから聞いていたルーク像に加えて、このラブレターを読んだピーターは、ルークとアデルの強い心の結びつきをあらためて感じるとともに、合衆国憲法が保障する権利とは何か、そのことの価値は何か、ということをし意識しはじめたのだった。

＜クライマックス—審問会での証言＞

そして審問会での証言の日。いよいよクライマックスだ。カメラのフラッシュを浴びるピーター。ローソンの町民たちもテレビ・ラジオで放送される審問会の様子を興味深く見守っていた。シナリオでは、ピーターが用意した転向声明を読みあげればそれで「ジ・エンド」とされていたのに、ピーターに対していくつかの質問が出された。

「なぜ審問会への出頭を拒否して逃走したのか?」「なぜ共産党系のサークルに入ったのか?」etc・・・。

これに対しピーターは「サークルに入ったのは好きな彼女がいたからだ。自分もサカリがついていたからネ」と率直に(?)答え、議場の爆笑を誘う。無用なやりとりは混乱を招くだけだと判断した議長は「ごたごたはいいから早く用意した声明を読むように」と命じた。声明文を読みあげようとするピーター。

しかし意外なことに(?)、自分では簡単だと考えていたウソの声明文を読みあげること

は、ピーターにとって大きな苦痛だった。言葉が途切れてしゃべれない。「水を飲んでいいですか」と許可をもらい水を飲んでもやはり同じ。議長もしびれを切らしエイライラ状態だ。そして……。結局ピーターは声明文を読むことを放棄したのだった。もちろん声明文を読まないということは監獄入りを覚悟しなければならないことはわかっている。それでもピーターはインチキ転向声明文を読めなかったのだ。そしてピーターは、ここではじめて自分の心の叫びを言葉にする。このピーターの「演説」はインチキ声明ではなく、真実の声であるだけに感動的だ。

「僕はちゃらんぼらん人間だが、ルークは信念の人だ。もし僕がピーターではなくルークだったら、ルークはどう言うだろうか。ルークは国のために闘いそして死んだ。しかし今アメリカはこんな腐った国になっている。なぜなんだ。おかしいじゃないか！僕が今手に持っている合衆国憲法にはこう書いてある。すなわち、表現の自由は保障されると。アメリカは自由の国ではないのか！」

活動家でもなければアジテーターでもない、単なる1人のプレイボーイのピーターがここで打つ大演説は、本当に感動的。人間の尊厳や憲法で保障する基本的人権の価値そして自由の国アメリカの誇りをピーターは自分の言葉で本心から訴えた。本当に、アメリカという国の奥深さを感じることができて胸をうつ場面だ。恥ずかしながら、私は涙があふれ出てくるのを止めることができず、両隣の若いアベックに気をつかいながら、何回もハンカチで涙をふいた。何とも感動的なクライマックスだ。

＜そして結末は……＞

もちろんピーターは刑務所行きを覚悟していた。しかし逆にピーターが「殉教者」としてヒーローになることを恐れた非米活動委員会は、ピーターを無罪放免。今ピーターの最大の関心は、アデルは今、ルークではなくピーターを愛してくれているのかどうかだ。そこでピーターは最後の賭けに出る。汽車に乗ってローソンのまちへ帰るピーターは、アデルに手紙を出し、駅に迎えに来ていなければ、そのまま黙ってアデルやローソンのまちと別れることを告げた。そして汽車はローソンのまちへ……。最後の結末は……。それを書くのはヤボというものだろう。

＜登場人物と俳優たち＞

主人公のピーター（ルーク）を演ずるジム・キャリーは本当にハンサムボーイ。新進脚本家でプレイボーイのピーター。ダンスもうまくピアノもうまい。しかし「赤狩り」によって幸せの絶頂から失意のどん底へつき落とされた。ジム・キャリーは、見失った自分をさがしながら、周囲の温かい援助の中で、少しずつ立ち直り新たな人間として生きることを決心する若者、そして非米活動委員会の審問会という大舞台で本当の自分を発見する若者をのびのびと演じており、好感がもてる。

そしてこれを支えるのは父親ハリーの演技。帰還した息子を抱きしめ、愛情を注ぎこむ父親の姿は感動的だ。「マジスティック」を再建する決心をしたルークとの共同作業や再建された「マジスティック」で大好きな映画を上映するためフィルムを回す仕事に、ハリーはどれほどの喜びをもって取り組んだことだろう。砂浜に打ちあげられたピーターは、ハリーにとってルークであり、希望そのものだった。そしてそれはまた、多くの戦死者を出したローソンのまちの人達にとっても全く同じだった。そのルークへの希望をワキを固める数多くの芸達者な女優たちがローソンのまちの人たちとして演じている。

そして、例によってすぐに好きになってしまったのが、アデルを演ずるローリー・ホールデンだ。格別の美人と言うわけではないが、1951年という時代の、田舎町のお嬢さんでありながら、知的で活動的そしてアメリカの良心を象徴するような法律家のたまごをイキイキと演じている。目の前の恋人は本当にルークなのか、それとも別人なのか、心のどこかにその不安を抱きながら恋人との距離を少しずつ縮めていくアデルの女心がいじらしく伝わってくる。そして驚くのが、審問会での証言をめぐるピーターとの論争。目の前の恋人がルークではないことが明白となったショックの中でも、アデルはピーターに対して、アメリカ合衆国憲法の価値、自由の国アメリカの価値を真正面から説いた。これは、ルークのラブレターと相まって、法学部の学生の議論にすぎないと一蹴することなどとてもできないほど迫力と真実味にあふれるものだった。ひたすら前向きに、希望と誇りを持って進んでいく1950年代の若い女性アデルは本当に素敵だと思う。

<総評>

よく練られうまく構成されたストーリーであるため、若者から年輩者まで多くの人たちが楽しめる名作であることは間違いない。しかし、1950年代のアメリカ合衆国のおかれた立場、その中で生まれ背負いこんだ「赤狩り」という負の遺産、そして合衆国憲法における基本的人権の尊重というテーマ（この映画でアデルやピーターが叫ぶ基本的人権としての「表現の自由」の価値は、日本国憲法でも全く同じ）を少しずつこんで勉強すれば、もっとこの作品の深みを理解することができるだろう。十分に楽しめかつ感動することができる、超おすすめ作品だ。

2002（平成14）年7月10日記